

JCLA

日本比較文学会東京支部

研究報告

No. 18-2021

目次

研究論文

- 誤解を恐れる幽霊—ラフカディオ・ハーン『中国怪談集』より「顔真卿の帰還」
を読む—
川澄亜岐子……………2

記録

- 東京支部 2020 年研究発表の記録
…………… 12
- 執筆者一覧
…………… 13
- 編集後記
…………… 14
- 投稿規定・執筆要領
…………… 15

誤解を恐れる幽霊

ラフカディオ・ハーン『中国怪談集』より「顔真卿の帰還」を読む

川澄 亜岐子

1. 「顔真卿の帰還」について

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904) の著作には、相手への信頼を示すために死を選ぶ人物がたびたび描かれる¹。「顔真卿の帰還」(“The Return of Yen-Tchin-King”) もその一つで、『中国怪談集』(*Some Chinese Ghosts*, 1887) の所収作品としてアメリカで発表された。原話として参照されたのは、中国で南宋時代に成立したとされる『太上感應篇』の「神仙可冀」(神仙冀うべし) という章の一部である。『太上感應篇』は道教の教えを軸に日常的な倫理や道徳を説く訓話集で、「神仙可冀」では、徳を積んだ結果、不老不死になるとして孝徳が奨励される。ハーンが読んだのは、同書の仏語訳である³。以下、この仏語訳に沿って原話の概略を示す。

唐代、最高裁判所の長官を務めていた顔真卿 (Yen-tchin-king) は、地方で起きた反乱の平定を皇帝から命じられる。彼は敵陣に赴いて首謀者の李希烈 (Li-hi-lié) に面会するが、説得に失敗して絞首に処される。その後、官軍が挙兵し、反乱軍を降伏させる。顔真卿は都で供養されることになり、移送のために棺が開かれた。遺体は血色がよく、

¹ 例えば、ともに『怪談』(*Kwaidan*, 1904) 所収の「乳母桜」(“Ubazakura”) や「十六桜」(“Jiu-Roku-Zakura”) がある。

² 『中国文化史大事典』(大修館書店、2013年)、「太上感應篇」の項。

³ *Le livre des récompenses et des peines, en chinois et en français; accompagné de quatre cents légendes, anecdotes et histoires, qui font connaître les doctrines, les croyances et les moeurs de la secte des Tao-ssé.* Traduit du chinois par Stanislas Julien (Paris: the Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland, 1835). 以下、同書は表題を *Le livre* と略記する。「神仙可冀」の章は、漢字の表題に«Il peut espérer de devenir immortel.»というフランス語の副題が添えられている。尚、ハーンの旧蔵書を収蔵する富山大学のヘルン文庫の目録には、同書が記載されている(富山大学附属図書館『富山大学附属図書館所蔵 ヘルン(小泉八雲)文庫目録』テキスト版、2019年、蔵書番号[2022])。以下、同目録は『ヘルン文庫目録』と略記する。

まるで生きているかのようにだった。一人の道士がこれを見て、顔真卿は不死身になったと宣言し、後日、顔家の下僕が死んだはずの主人の姿を目撃する。

ベンチョン・ユーは、ハーンの再話を「中国人の魂」の「翻訳」として、彼の異国趣味の問題に位置づける。そして、顔真卿が死んでいく描写に着目し、「人間の忠誠心が天の意志をも動かすことができる」という主題を読みとった⁴。また、近年刊行されたハーンの邦訳作品集では、「顔真卿の帰還」の解説として、「死をも超越した人間の信と義」という主題がハーンの別の再話作品である「守られた約束」(“Of a Promise Kept” in *A Japanese Miscellany*, 1901) と類似することが指摘される⁵。しかし、これらの言及を含め、「顔真卿の帰還」を具体的に分析した論考は見当たらない。

本稿では、李希烈に面会した顔真卿が焚火に飛び込む場面と、彼が殺される場面、そして彼の幽霊が現れる場面の三か所を取りあげ、原話と再話を比較する。一連の考察を通して、顔真卿の献身的な姿勢の特徴を明らかにするとともに、再話の書き換えの背景について考えていく。

2. 顔真卿の献身的な態度

最初に、顔真卿が李希烈に面会し、焚火に飛び込む場面を、原話から引用する。

Hi-lié éleva un bûcher au milieu de sa cour et lui dit : «Si vous ne m’obéissez pas, je vous fais jeter dans le feu.»

Tchin-king lui lut les ordres de l’empereur qui sévit contre les méchan[t]s, et comble de bienfaits les hommes vertueux. Il lui rappela ensuite les devoirs que les sujets sont tenus de rendre à leur souverain, et se précipita dans les flammes.⁶

自分に従わなければ火の中に投げ込んでやる、という李希烈の脅しに臆せず、皇帝の親書を読み上げたり、「臣民は君主に従う義務がある」ことを彼に思い出させたりすることからわかるように、顔真卿は実直で責任感のある人物として設定される。この

⁴ ベンチョン・ユー『神々の猿——ラフカディオ・ハーンの芸術と思想』（池田雅之監訳、今村楯夫・坂本仁・中里壽明・中田賢次訳、恒文社、1992年）、106頁。

⁵ 池田雅之「解説」、ラフカディオ・ハーン『新編 日本の怪談Ⅱ』（池田編訳、KADOKAWA、2019年）、366-367頁。

⁶ *Le livre*, p. 131.

性格は、炎に飛び込む行為に最もよく表れている。顔真卿は李希烈の面前で焚火に身を投げることで、任務のためには命も惜しまないという強い覚悟を示すのである。

再話では、これらの出来事が順序を入れ替えて語られる。まず、顔真卿は李希烈に面会してすぐに、皇帝の親書を奉読する。それを聞いた李希烈が「残忍な笑みを浮かべて」(“with an evil smile”) 顔真卿を脅すと、彼は天地に拝礼して炎に飛び込む。再話では、顔真卿が親書を読む箇所と李希烈が彼を脅す箇所が原話とは逆の順になったことで、李希烈が顔真卿を脅す理由が原話よりも明確になった。李希烈は皇帝の親書の内容が気に入らず、その不満を顔真卿に向けたのである。そして、顔真卿が炎に飛び込む箇所は、次のように語られる。

“Tchin-King, O son of a dog! if thou dost not now take the oath of fealty, and bow thyself before me, and salute me with the salutation of Emperors—even with the luh-kao, the triple prostration—into that fire thou shalt be thrown.”

But Tchin-King, turning his back upon the usurper, bowed himself a moment in worship to Heaven and Earth; and then rising suddenly, ere any man could lay hand upon him, he leaped into the towering flame, and stood there, with folded arms, like a God.⁷

李希烈が皇帝を意識するのは、彼が皇帝の権力を望むからに他ならない。李希烈が忠誠の誓いとともに顔真卿に求める“the luh-kao”とは、「跪いて頭を地面に打ちつけてから、まっすぐに立ち上がる」ことを三回繰り返す敬礼の作法で、中国では神や皇帝に行われる最敬礼とされる⁸。したがって、「俺に頭を下げ、皇帝にするのと同じ方法で敬礼せよ」という李希烈の命令は、現在の皇帝に代わる新たな皇帝として彼を認め、崇めよ、という要求なのである。

一方、顔真卿は、李希烈に背を向け、「天と地」に拝礼して彼の要求を退ける。中国では、「天帝」または「上帝」といわれる存在が世界の最高神として崇められ、皇帝はその意思を代行する存在と考えられた。そのため、天と地に祈りを捧げることは、最

⁷ Lafcadio Hearn, *The Writings of Lafcadio Hearn* vol. 1 (Kyoto: Rinsen Book, 1973), p. 256.以下、同書は表題を *WLH* と略記する。

⁸ S. Wells Williams, *中国総論 The Middle Kingdom: A Survey of the Geography, Government, Literature, Social Life, Arts, and History of the Chinese Empire and Its Inhabitants* vol. 1, (London: W. H. Allen, 1883), p. 801.同書では、中国の礼は敬意の程度に従って八つの段階があり、“the luh-kao”はその第七段階であることが紹介される。

高神と皇帝に敬意を表し、服従を誓うことを意味する。“Heaven”と“Earth”がそれぞれ大文字から表記されることも、これらの二つの権力を反映したものと思われる。

再話はまた、顔真卿が炎に飛び込んだ後の描写も原話より詳しい。顔真卿が「塔のように」激しく燃える炎に「飛び込んで」、腕を組んで立つまでの動作が流れるように進むのは、彼が任務のために死ぬことを躊躇しないからで、ここにも皇帝に対する彼の献身的な姿勢が見られる。現実的に考えれば、炎に飛び込んだ顔真卿は、重度の火傷を負っても不思議ではない。だが、彼は熱や炎で傷つくことなく、「まるで神のような」態度で堂々と佇んでいる。この超人的な性質は、皇帝に対する献身の褒美として天から与えられた恩恵であると考えられる。

3. 顔真卿の不安

原話と再話はともに彼を皇帝に献身的に仕える人物として描くが、原話では誠実に職務に当たる姿が強調されたのに対し、再話では彼が皇帝に服従する意志を言動によって示す様子が前景化された。次に顔真卿が殺される場面を考察し、再話の特徴が何を意味するのかを考える。まずは、原話から確認する。

Il persista jusqu'à la fin à ne point vouloir s'asseoir en face de ces brigands. Ceux-ci le pendirent pour se venger de son mépris.⁹

顔真卿は反乱軍を「悪党ども」(«ces brigands»)と呼び、その申し出を拒むことに「最後まで」(«jusqu'à la fin»)「固執した」(«persista»)。彼が反乱軍と同席することを拒む際の«ne point vouloir」という表現にも、彼の強固な意志が込められている。だが、彼の潔癖な性格は、反乱軍から李希烈を「軽視」したと解釈され、その「復讐」として顔真卿は縊死させられる。

再話では、この場面は顔真卿と李希烈の直接的な交渉に変更された。再話は、李希烈が顔真卿を宴に招くが、これを拒まれ、衝動的に刀を抜いて彼に斬りかかるという展開で、原話よりも緊迫した二人のやりとりが焦点化される。

But Tchín-King, looking upon him unswervingly, replied in a voice clear as the voice of a great bell:

“Never, O Hí-lié, shall I accept aught from thy hand, save death, so long as thou shalt

⁹ *Le livre*, p. 131.

continue in the path of wrath and folly. And never shall it be said that Tchin-King sat him down among rebels and traitors, among murderers and robbers.”

Then Hi-lié, in sudden fury, smote him with his sword; and Tchin-King fell to the earth and died, striving even in his death to bow his head toward the South—toward the place of the Emperor’s palace—toward the presence of his beloved Master.¹⁰

李希烈を「じっと見つめる」視線や、「大鐘のように明朗な声」の様子から、顔真卿の毅然とした態度がうかがわれる。この直前に彼が炎に飛び込んだことを思い起こせば、「お前の手からは、死以外の何も受け取らないぞ」という言葉は文字通りの意味を持ち、顔真卿の覚悟が凄みをもって伝わってくる。また、顔真卿から李希烈への返答の中で“shall”、“save”、“shalt”などの古風で形式的な言葉が使われることも注目される。このような堅苦しい言葉づかいには、李希烈を突き放し、牽制しようとする顔真卿の意志を読みとることができる。これらの言動は、彼が炎に飛び込んだ場面と同様に、命がけで皇帝に尽くす覚悟を示すものである。

ではなぜ、彼はこれほどまでに皇帝に献身する態度を表明するのだろうか。その理由は、李希烈の誘いを断る顔真卿の言葉に表れている。顔真卿は、「顔真卿が反逆者や逆賊、人殺しや強盗たちと同席した、とは言われたくない」と言って李希烈の誘いを断るが、ここには、敵方と卓を囲むことで、皇帝を裏切り、反乱軍に与したと思われるのではないかという顔真卿の懸念を読みとることができる。この時、彼が白眼視されることを恐れた人の筆頭が、主君である皇帝であったことは想像に難くない。顔真卿はこの不安な気持ちの裏返しとして、李希烈の申し出を断固とした態度で断ったと考えられる。つまり、顔真卿の献身的な態度によって入念に示される皇帝への服従とは、主君である皇帝に誤解され、その信頼を失うことへの怖れに裏打ちされたものであったといえる。

再話では、顔真卿の殺害方法も原話と異なる。反乱軍が李希烈に忖度して顔真卿を絞首に処した原話と異なり、再話では、衝動的な怒りに駆られた李希烈が顔真卿を刀で斬りつける。この性急な展開は、“sudden”、“smote”、“sword”という S の音の反復によって聴覚的な効果としても表されている。さらに、深手を負っても懸命に拝礼する顔真卿の姿も再話にしか見られない。そこでは、“toward the South—toward the place of the Emperor’s palace—toward the presence of his beloved Master”と拝礼の対象が絞り込まれる過程に、顔真卿が皇帝への思いを深めていく様子が重ねられ、とくに最後の“beloved Master”には皇帝に対する敬愛の念が凝縮されている。

¹⁰ *WLH* vol. 1, p. 257.

以上のように、皇帝に対する顔真卿の献身的な態度には、複層的な解釈の可能性が見出される。顔真卿は最期まで皇帝を崇敬する態度を貫き、瀕死の状態でも皇帝に拝礼することを欠かさない。これは一見、家臣として模範的な行為であるが、根底には皇帝の信頼を失うまいとする危機感がある。

4. 不安は解消されたのか

続けて、顔真卿の幽霊が現れる場面を取りあげて、彼の不安についてさらに考察する。これは、再話で最も大きく変更された箇所である。まずは原話から引用する。

Quelque temps après, un serviteur de Tchín-king vit son maître se promener dans le palais, et l'on reconnut alors qu'il était devenu immortel.¹¹

以上は、原話の末尾の文章である。顔真卿の死から「しばらく経った後」、顔家の下僕が主人の姿を目撃する。だが、話はこれ以上展開されず、顔真卿が不死身になったことを確認して原話は終わる。

再話では、顔真卿の幽霊が登場する場面が二か所に増やされ、話の結末ではなく、彼が殺された場面の直後に移される。その一つが、幽霊が皇帝に面会する場面である。

Even at the same hour the Son of Heaven, alone in the inner chamber of his palace, became aware of a Shape prostrate before his feet; and when he spake, the Shape arose and stood before him, and he saw that it was Tchín-King. And the Emperor would have questioned him; yet ere he could question, the familiar voice spake, saying:

“Son of Heaven, the mission confided to me I have performed; and thy command hath been accomplished to the extent of thy humble servant’s feeble power. But even now must I depart, that I may enter the service of another Master.”

And looking, the Emperor perceived that the Golden Tigers upon the wall were visible through the form of Tchín-King; and a strange coldness, like a winter wind, passed through the chamber; and the figure faded out. Then the Emperor knew that the Master of whom his faithful servant had spoken was none other than the Master of Heaven.¹²

¹¹ *Le livre*, p. 131.

¹² *WLH* vol. 1, pp. 257-258.

ここでは、顔真卿が幽霊であることが不可解な現象を通じて示される。彼は絶命と「ちょうど同じ時刻」に、皇帝の居室に現れる。皇帝は最初、「影」として彼を認識し、それが立ち上がったたり、話し始めたりしたことで、ようやく「影」が顔真卿であることに気づく。このように、皇帝が段階的に顔真卿を認識するのは、一つ一つの違和感を強調するためだろう。皇帝が「ただ一人」で過ごしている「私室」に現れた「影」とは何か。なぜ、敵陣にいるはずの顔真卿が皇帝の「私室」に現れるのか。これらは顔真卿の正体に関わる謎であり、さらに言えば、彼が幽霊だから実現したことである。

一方、顔真卿は遜った物言いや「皇帝の面前にひれ伏す」など、礼儀正しい態度で皇帝に接する。だが、任務を報告するところでは、“the mission confided to me”、“thy command”と任務が皇帝の命令であることを強調したり、“performed”、“accomplished”と言葉を重ねてその完遂を強調したりする表現が見られる。ここに、自分が皇帝を裏切っていないことを伝え、皇帝の理解を求めようとする顔真卿の気持ちが垣間見える。

その後、幽霊は現れた時と同じように、徐々に消える。彼の身体を透かして壁にある虎の絵が見えるようになり、居室を「木枯らしのような、奇妙な冷気」が通り抜ける。この過程を経て、皇帝は家臣の死を悟り、彼の「新しい主君」が「天帝」であることに思い至る。顔真卿の死が端的に伝えられないことや、幽霊が段階的に現れたり去ったりする展開は、事態を把握した時の皇帝の驚きを効果的に描いている。顔真卿の姿が見えなくなり、皇帝が彼の正体に気づいた時、改めて顔真卿のことを「忠実な家来」(“his faithful servant”) と思い返すことは、皇帝が彼の弁明を受け入れ、改めて彼への信頼を示したことを物語っている。

この場面が続いて、顔家に長年仕えてきた下僕が、主人の幽霊に出会う場面がある。内容は原話と似ているが、再話の描写は原話よりも詳しい。

Also at the same hour the gray servant of Tchin-King's house beheld him passing through the apartments, smiling as he was wont to smile when he saw that all things were as he desired.

“Is it well with thee, my lord?” questioned the aged man.

And a voice answered him: “It is well”; but the presence of Tchin-King had passed away before the answer came.¹³

ここでもまた、幽霊は肉体の死と「ちょうど同じ時刻」に現れる。すでに指摘した通り、これは顔真卿が幽霊であることの符号である。彼は「物事が望みどおりに進ん

¹³ *WLH* vol. 1, p. 258.

でいるのを見た時にいつも見せた微笑」を浮かべ、すべて順調か、と問う下僕に「順調だ」と答える。原話の下僕は離れた場所から顔真卿の姿を見かけたにすぎないが、再話では二人の間に言葉が交わされる。微笑や「順調だ」という言葉に加え、これらを顔真卿と旧知の下僕が確認するという三つの要素によって、晴れ晴れとした顔真卿の様子が描き出される。

顔真卿は皇帝の前で儀礼的な態度を崩さなかったが、下僕の前では屈託がない。この変化は、彼の不安が解消されたためであると考えられる。顔真卿は任務の遂行と自身の貢献を皇帝に伝え、理解が得られたことを確認した。ゆえに、皇帝の信頼を失う恐れがなくなり、さっぱりした気持ちで下僕のもとを訪れることができたのではないだろうか。彼が下僕に見せた微笑や、「順調だ」という言葉には、自身の評判を失わずに済んだ安堵が滲んでいるように思われる。

以上のように、顔真卿の幽霊の場面を二つの段階に書き分けたことで、再話では彼の不安が解消される過程が入念に描かれる。彼の不安とは、皇帝の誤解を招き、あらぬ疑いをかけられたり、白眼視されたりすることであった。だが、彼は幽霊となって皇帝に任務の遂行を伝えることができ、それを聞いた皇帝も彼が殉職したことに気づく。真相を理解した後、皇帝が顔真卿を「忠実な家来」として思い返したことで、彼の不安は解消される。そして、その後の穏やかな様子が、下僕の知覚や顔真卿自身の言葉を通じて丹念に語られる。

5. 屈原「離騷」への返答

「顔真卿の帰還」は、皇帝に献身的に仕える顔真卿の態度を、主君の信頼を失うことへの強い不安感の表われとして読み解いたテキストである。顔真卿は皇帝の期待に応えるために命を犠牲にする覚悟で任務に臨むが、李希烈を説得することができず、殺される。この間、彼は李希烈の要求を拒んで焚火に飛び込んだり、重傷を負っても拝礼しようとしたりして、皇帝への敬愛を自他に示そうとする。一見すれば、これらは主君に忠実な家臣にふさわしい振る舞いであり、顔真卿の勇姿を象徴するように思われる。だが、今回の分析で明らかになったように、これらの行為には主君の信頼を失ったり、自身の評判が下がったりすることへの懸念が内包されている。皇帝に尽くそうとする顔真卿の極端な態度は、皇帝からの信頼や評価を失いたくないという気持ちの裏返しである。

ではなぜ、ハーンは顔真卿を皇帝からの信頼や自身の評判に固執する人物として書き換えたのだろうか。再話に施された変更の背景について、「顔真卿の帰還」の題辞を手がかりに考えてみたい。

「顔真卿の帰還」には、屈原 (c. B. C. 340-c. B. C. 278) の「離騷」という詩の一節が題辞として引かれる。この詩は、同僚の官僚たちの讒言によって主君から疎んじられ、宮廷を追われた詩人が不遇を嘆いた後に天界に上るというもので、ハーンはこれをフランス語の翻訳で読んだ¹⁴。以下に、「顔真卿の帰還」の題辞を引用する。

Before me ran, as a herald runneth, the Leader of the Moon;
And the Spirit of the Wind followed after me—quickening his flight.¹⁵

これは詩人が天を目指す場面の一節で、「私」が「月の御者」と「風の精霊」に挟まれて、天に上っていく箇所である。“Before me”、“after me”と呼応する表現や、“ran”、“runneth”、“quickening”などの速度を伴う動作を通して、一行が天に向けて安定的に歩みを進める様子が語られる。「月の御者」や「風の精霊」に守られながら、天に導かれていく「私」の様子は、不安から解放され、穏やかな気持ちで現世から去っていく顔真卿の姿を想起させるものである。

『中国怪談集』の巻末にある語注において、ハーンは「離騷」の表題を“The Dissipation of Grief”と言い換え、悲しみを晴らそうとする詩人の心境に重点を置く解釈を示す¹⁶。注に見られる“the victim of a base court-intrigue”、“a vindication of his character”、“a rebuke to the malice of his enemies”などの表現には、宮廷で理不尽に扱われ、不遇の身にあるという詩人の主張を受け入れ、詩人を擁護しようとするハーンの様子が織り込まれている。詩人が宮廷を追われた悔しさを晴らすべく、自分に下された不当な評価を覆そうとする詩として、ハーンは「離騷」を理解した。そのうえで、詩人の悔しさに焦点を当て、不安や懸念を動機として、自己犠牲的な行為が実践される場合があることを示そうとしたのが、「顔真卿の帰還」であるように思われる。

¹⁴ Kiu Youen, *離騷 Le Li-Sao : poème du IIIe siècle avant notre ère*. Traduit du chinois, accompagné d'un commentaire perpétuel et publié avec le texte original, par le Marquis d'Hervey de Saint-Denys (Paris : Maisonneuve, 1870). 『中国怪談集』の巻末の語注にある「離騷」の項に“A fine French translation of the ‘Li-Sao’ has been made by the Marquis Hervey de Saint-Denys (Paris, 1870)”とある。このため、同書を「顔真卿の帰還」の題辞の出典と同定できる (WLH vol. 1, p. 296)。ハーンの言及は仏語訳にだけ及ぶことから、引用箇所の英訳はハーンによると思われる。なお、『ヘルン文庫目録』に同書の記載はない。

¹⁵ WLH vol. 1, p. 253.

¹⁶ WLH vol. 1, p. 296.

「顔真卿の帰還」に描かれる顔真卿の姿は、ハーンの後期の著作に描かれる身代わりや自己犠牲を自分の使命として引き受け、死んでいく人物像とは一線を画す。だが、顔真卿の抱える不安や、それが解消された時の穏やかな様子には、「離騷」に対するハーンの応答を見ることができる。ハーンは「離騷」の詩人が抱える苦悩に着想を得て、彼の不遇に同情した。その同情や共感が、「顔真卿の帰還」という新たなテキストを生み出す原動力になったのではないだろうか

《記録》

研究発表 2020 年

2020 年 1 月例会（東京大学駒場キャンパス）

■柴田環をめぐる報道と、日本におけるオペラ黎明期の“プリマ・ドンナ”
表象について

早稲田大学(招聘研究員) 大西由紀

■日英『ガリヴァー旅行記』図像の系譜と変遷

早稲田大学(招聘研究員) 千森幹子

*千森氏の発表は発表者の事情により、中止となりました。

*3 月以降に予定されていた例会及び支部大会は、新型コロナウイルスによる感染症
蔓延のため、すべて中止となりました。

執筆者一覽

(敬称略)

■ 川澄亜岐子 東京大学 (院)

編集後記

編集後記

新型コロナウイルスによる感染症の猛威も昨年終わりには第5波の終熄を迎え、どうやらこれで目途がついたかと思うまもなく、オミクロン株とやりに置き換わった後は急速な感染増により、世界全体の人間活動が減衰していく様子がみられます。大学の授業についても、どうやら対面方式に戻れそうだな、と思った途端に再び遠隔授業に逆戻りというところも多いようです。

とりわけ大きな影響を受けているのが、いわゆるパフォーマンス芸術の分野で、コンサートやライブの多くが中止、劇場も公演中止や入場者数の制限が再び多くなってきています。

支部会員のみなさまにとっても、出口の見えない状況でどこに目標を置いたらよいのか、何を頼りに研究を進めるべきなのか、迷うことの多い日々が続きます。しかし、私たちの仕事はその成果を世に問う場所がある限り、意味を失うことはありません。しかも、文学という分野、とりわけ比較文学は世界が舞台であり、私たちの関心は人間活動のすべてに通底しているはずです。

『東京支部研究報告』は第18号となりますが、投稿論文は3篇の多くを数えたものの、いくつかの残念な事情から掲載論文は1篇にとどまりました。次号はさらに多くの論文を掲載できるよう、とりわけ若手会員のみなさまの奮起を期待したいと思います。

(椎名正博)

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文投稿規程

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』（以下、「電子版『研究報告』」）は、原則として毎年一回、3月末日に発行される。電子版『研究報告』への研究論文の投稿は、以下に定める手続きによるものとする。

1. 投稿資格

研究論文の投稿資格を有する者は、本学会員で、前年および前々年に開催された東京支部例会または東京支部大会において研究発表や講演等を行なった者とする。投稿者は、支部例会または支部大会における各自の発表をもとに、投稿論文の原稿を作成すること。

2. 論文の字数（語数）および書式

投稿論文の字数（語数）および書式等については、別に定める「電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文執筆要領」に従うこと。

3. 論文の提出

投稿論文の電子媒体のファイルを、11月1日から11月30日までの間に、以下の送付先に送付すること。

送付先：日本比較文学会東京支部編集委員会委員長 椎名正博
shiina@chs.nihon-u.ac.jp

4. 採否の決定

投稿論文の採否は、東京支部編集委員会および企画委員会が査読の上、決定する。なお、必要と認められる場合には、上記両委員会の委員でない支部会員に査読を委嘱することがある。

5. 著作権等

投稿者は、電子版『研究報告』に掲載された研究論文の著作権を有するが、掲載が決定された時点で、日本比較文学会東京支部がワールドワイドウェブによって公衆送信することを許諾したものとする。

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』研究論文執筆要領

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』への研究論文の投稿にあたっては、以下の執筆要領に従って原稿を作成すること。

1. 使用言語

使用言語は日本語、英語またはフランス語とする。

2. 字数（語数）

原稿は横書きとし、注等を含めて、日本語の場合は8,000～12,000字とする。英語およびフランス語の場合は3,500～5,000語とする。

3. 書式

東京支部のホームページより、投稿用のテンプレート（ひな形）をダウンロードして使用し、テンプレートに記載された書式に関する留意事項を踏まえて、原稿を作成すること。

4. 図版の使用

写真、図、画など図版を挿入することもできるが、図版が占めるスペースも、規定の字数のうちに含まれるものとする。また、図版の掲載に関する著作権等の問題の解決は、すべて投稿者の責任において行なうこととし、十分に著作権法を尊重するよう注意すること。

日本比較文学会東京支部 研究報告 No. 18

発行人 佐藤宗子
発行日 2022年3月20日

編集委員会（編集担当）

委員長 椎名正博
委員 庄子ひとみ 鈴木美穂 堀江秀史 安元隆子

事務局 〒162-8644東京都新宿区戸山1-24-1
早稲田大学 文学学術院 源 貴志研究室

TEL : 03-5286-3725

E-MAIL: hikakubungakutokyo@gmail.com